山陽新聞

2011年(平成23年)4月30日 土曜日

©山陽新

滴一滴

数年前、在宅ケアの取材で一人暮らしをしている92歳の女性に会った。デイサービスのカラオケで氷川きよしを歌う明るい人だが、80歳を超えてから骨折などで8回も入退院を繰り返していた▼入院が長引き、もう家に戻れないかと何度も気落ちした女性だが、支えになったのが20年近い付き合いの開業医だ。「僕が診るから帰っておいで」と励まし、介護事業所と連携して帰宅後のケア態勢を整えた。「生活」に長く寄り添うかかりつけ医の大切さを痛感した▼東日本大震災では開業医も多く被災した。津波で建物や医療機器が壊れて診療もままならない。かかりつけ医の役割を果たせず、じくじたる思いだろう▼避難所などに全国から医師が応援に駆けつけているが、多くは短期間で地元に帰る。今後、患者が仮設住宅に引っ越すなど、それぞれの「生活」に移行していく中で支援が途切れないか心配だ▼「どう撤収するかが課題」。国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の菅波茂代表は、被災地での医療活動を早めに地元の医師へ引き継いでいく必要性を訴える。そのために開業医が働ける仮設診療所の建設などさまざまなサポートが重要だと話す▼被災地では既に地元での再建を断念する開業医も出ているという。医療の復興を急がねばならない。